

F M U  
NEWS Letter  
震災15年企画



FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

東日本大震災・原子力災害から15年

福島県立医科大学の使命と歩み  
—未曾有の危機を越え、次の15年へ—



# 1 献身と決意の表明

## 1.1 危機対応の起点と県民への深甚なる感謝

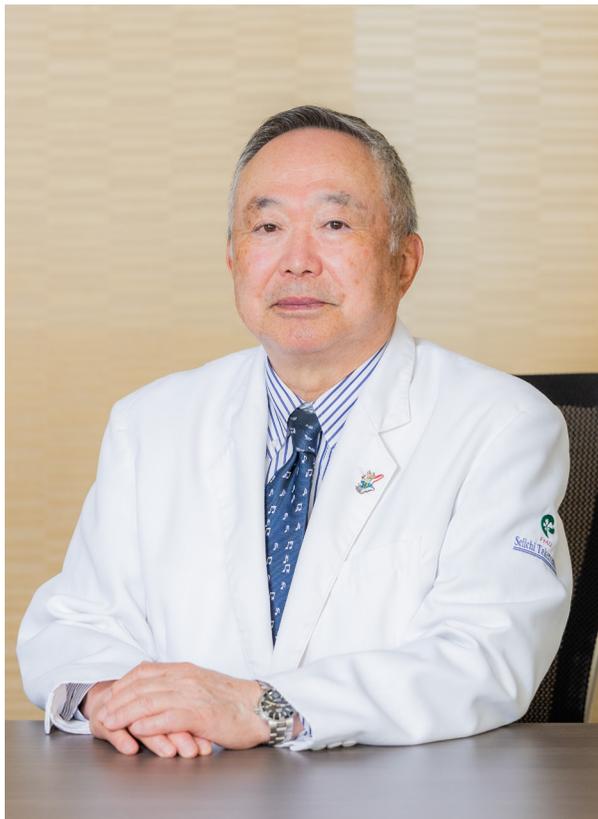
東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故後、本学は、目に見えない放射線被ばくによる健康不安を抱える県民の皆様の心身を見守り、長期にわたって寄り添い続けるという、本学の根幹をなす不変の責務を果たしてきました。

本特集では、震災から今日までの歩みを振り返りながら、本学が果たしてきた使命と、次世代へ繋ぐ挑戦を紹介します。

事故当時、低線量被ばくの線量評価と健康影響の有無が明確ではなかったことから、本学主導で30年にわたる「県民健康調査」を立案、開始しました。この事業そのものが健康危機管理であり、福島復興支援のための国家プロジェクトとして「県民の健康見守り事業」となり今へと変遷しています。この不変の責務を確実に果たすべく、2011年に「福島医大復興ビジョン～悲劇を奇跡に～」を策定し、2016年には「ふくしま国際医療科学センター」の全部門での取組が本格開始されました。

震災から15年が経過した今、私たちはこの未曾有の経験から何を学び、次にどう生かすべきか。その答えを「福島の教訓」として体系化し、次の世代に確実に引き継いでいく歴史的責務を負っています。震災の経験を世界に向けて発信し、風化させないこと、そして根強い風評被害を科学の力で払拭するため、県と一体となって引き続き強力に推し進めてまいります。

## 1 献身と決意の表明 | 理事長兼学長メッセージ



公立大学法人福島県立医科大学  
理事長兼学長

竹之下 誠一

東日本大震災により被害にあわれた方々に、改めて心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

本学は、2011年の震災と原発事故以来、福島復興を医療の立場から支えることを使命として歩を進めてまいりました。その象徴の一つが『ふくしま国際医療科学センター』です。福島復興と挑戦の姿を世界に発信する拠点として、また『放射線健康リスク科学』という新たな学問分野の確立を通じて、県民の健康の長期的な見守りや原子力災害医療体制の充実、国際社会への貢献を続けています。

福島の医療の最前線、そして最先端に立つ砦として、私たちは決して問題を先送りしない『不屈の精神』を持ち続けてきました。同時に、常に前へ進むためには、困難に立ち向かう強さと、環境の変化に適応するしなやかさ（レジリエンス）、国内外の有識者や組織との強固な連携（アライアンス）、そして機敏さ（アジリティ）が必要です。すなわち、大学人ひとりひとりが『不屈の精神としなやかさ、連携、機敏さ』を堅持することが、震災から学んだ大切な教訓であると考えております。

私たちは、ピンチをチャンスへと前向きに捉えて、悲劇を奇跡に、そして進化に変え、困難を未来への原動力へと転換し、国内外との連携を力に変えていく。その歩みこそが、福島の経験を新たな価値へと高める道であると信じております。本学は今後も、福島ならではの成果を追求し、その知見を次世代の医療人育成へと繋げながら、地域と世界に貢献してまいります。

## 2

# 科学的知識に基づいた 情報源としての役割

## 2.1 専門機関としての冷静な判断の拠り所

事故当時、不確実な情報が錯綜する中で、本学は医療の専門機関として「科学的知識に基づく冷静な判断」を呼びかけました。

原発事故という危機的状況も15年という時間の経過とともに変化し、その対応策と復興の状況も国情により異なります。医療関係者には、矛盾や不条理が孕むあらゆる局面でのゆとりと優しさの実践が期待されるからこそ、放射線のみならずあらゆる健康リスクに対する備えと対策が求められます。次世代には、歴史に学び、物事の本質を見極める実力を養ってほしいと願います。医療関係者ひとりひとりが、謙虚に専門領域での研鑽を続け、『ゆずり葉の精神』で絆を紡ぎながら柔軟に挑戦し続けるためにも、今この瞬間にこそ『生命への畏敬と憧れ(夢と希望)』を持つことの大切さを伝えたいと思います。



公立大学法人福島県立医科大学  
副学長／国際交流センター長

山下 俊一

# 災害の教訓が生んだ 「福島モデル」と臨床の最前線

## 3.1 患者の命を守る施設設計と災害の教訓が生んだ「福島モデル」

みらい棟1階にトリアージ機能を装備。コロナ禍において構築した「福島モデル」の基盤には、震災での診療記録流失などの経験を踏まえた医療連携の再構築があります。

本学の医療スタッフは福島県と一体となりコロナ禍で「福島モデル」を構築しました。重症・中等症・回復期で医療機関の役割を明確化し、県内の医療機関・関係団体が緊密に連携する体制を確立しました。その基盤には、東日本大震災での診療記録流失などの経験を踏まえた医療連携の再構築があります。震災の教訓を活かした医療再生・復興の取り組みが結実し、次の災害である新型コロナ対応を支える重要な仕組みとして「福島モデル」が生み出されました。地域の命を守る最後の砦として、その機能を最大限に発揮し続けます。



公立大学法人  
福島県立医科大学附属病院長  
大平 弘正

## 3.2 外部照射と内部照射（内用療法）の両面での世界最高水準の拠点化

放射性薬剤の製造から臨床応用まで一貫して行える先端臨床研究センターを中心に、高度な外部照射技術や免疫併用療法を融合させます。

本学附属病院は、放射性薬剤候補の製造からヒトへの治験まで確実に実績を積み重ねてきた先端臨床研究センターの研究基盤を有しています。私たちはこの強固な基礎の上に、高度な外部照射技術や免疫併用療法を高度に融合させ、放射線医学の最先端かつ世界最高水準の拠点としての発展を目指します。難治性がんに挑む希望の光を福島から世界へ発信し、地域の命を守る最後の砦から未来の医療を切り拓く中核拠点へ進化し続けます。

## 4 複合災害対応能力の体系化

### 4.1 原子力災害医療の国家拠点としての人材育成

福島事故の経験は、地震・津波・原子力災害という複数の危機が同時に発生する『複合災害』への対応が、いかに困難であるかを世界に示しました。

本学は、2015年に原子力規制委員会より『原子力災害医療・総合支援センター』および『高度被ばく医療支援センター』の指定を受け、原子力災害医療における全国の中核拠点として人材育成と医療体制整備を担っています。その一環として原子力災害時に派遣される医療支援チームの即応力と診療体制の実効力を担保する標準化された実践型研修を、県内外で年5回程度、延べ48回実施するなど、継続的に専門人材の育成と体制強化を図ってきました。院内職員向け原子力災害医療研修を通常業務の一部として実施し、これまで1,000名を超す職員が実技訓練等を通じて、災害時に県民が安心して医療を受けられる体制の強化に貢献しています。この<人材>こそが、次なる危機に対する私たちの恒久的な備えです。



公立大学法人  
福島県立医科大学附属病院  
災害医療部長／放射線災害医療学講座  
主任教授

長谷川 有史

# 5 地域医療の再生と持続可能性への挑戦

## 5.1 持続可能な人材育成：医師派遣・育成システム



公立大学法人  
福島県立医科大学  
理事（地域医療担当）

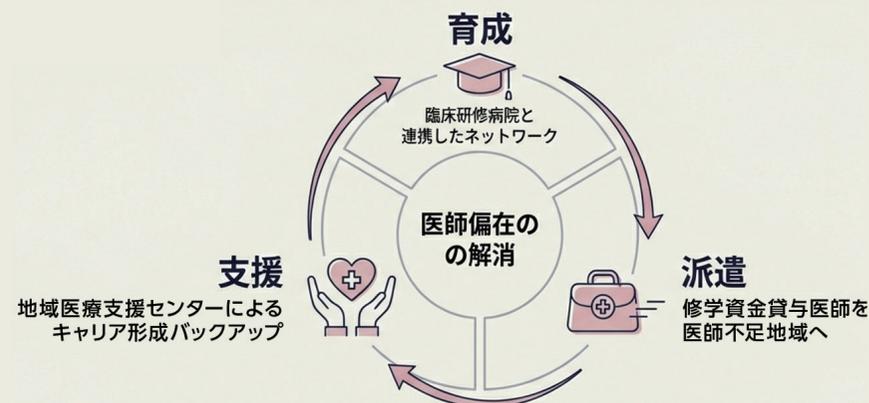
河野 浩二

福島が真の復興を遂げるためには、地域医療の持続可能性を確保することが不可欠です。本学は福島県と一体となり、県内の臨床研修病院と連携したネットワークを構築し、若手医師が地域医療の現場で学びながら、専門医等の指導のもとで医療人としてのキャリアを形成できる教育環境を整備しています。

さらに、医師偏在を解消するため、修学資金を貸与していた医師を、医師不足地域の医療機関に一定期間（3カ月等）常勤医として派遣する新たな取り組み「福島モデル」を令和6年度から開始しました。県内医療機関が一体となり、若手医師を組織的に支え成長を促す仕組みへと昇華したこれらの取組を通じ、地域医療の砦としての機能を将来にわたり維持し、県内医療体制の安定と発展に貢献してまいります。

### 地域医療の持続可能性：医師派遣の新たな「福島モデル」

令和6年度より始動



医師偏在の解消と、若手医師が安心して働ける環境の整備。

## 6 復興の象徴 | 双葉地域の中核的病院整備

### 6.1 災害復興と地域医療再生の共生モデル

双葉地域の中核的病院整備は、復興に向けた私たちの新たなビジョンの第一歩です。

震災後に医師数が激減したこの地域で、医療人材の確保を目的とした新たな支援制度の創設や、ICT技術を活用した『スマートホスピタル』の実現により地理的・人的制約を克服します。

双葉地域の医療提供体制には様々な課題が残っており、帰還された方や帰還を希望されている方々の不安解消には至っていません。

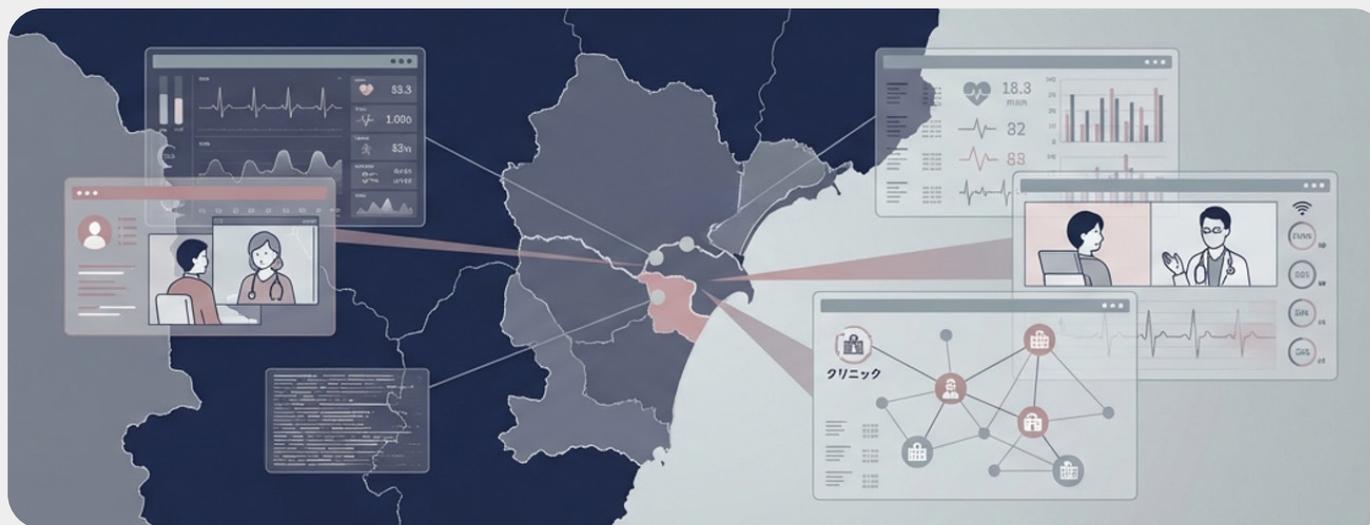
そうした状況の中で、中核的病院の整備は、非常に大きなインパクトを持ち、「双葉の医療」の大きな転換点となる可能性があります。



公立大学法人  
福島県立医科大学  
理事（地域医療担当）

河野 浩二

中核的病院は、災害医療や新興感染症対応、地域ニーズに対応した医療の提供や地域包括ケアシステム構築の支援等を通して、地域に密着し、連携の核となる病院を目指します。



# 7 復興のエンジンとしての教育・研究

## 7.1 研究成果の社会還元と「見える化」



### 活発な研究活動

英語論文数は年間1,000件を超え、復興の基盤となる高度な医学研究を推進。



### 論文の見える化

アニメーション等を用いて研究成果を一般の方へ分かりやすく伝えるプロジェクト。



### 共創と知の循環

知見を地域社会へ還元し続け、福島復興に実質的に貢献します。

本学の理念である医療人の育成と高度な医学研究こそが復興の基盤です。本学の研究活動は極めて活発で、英語論文数は震災時から倍以上となるなど高い成果を挙げています。臨床研究センターを中心に組織的に研究を推進する一方、YouTube等のアニメーションを用いて研究成果を一般の方に分かりやすく伝える『論文の見える化』プロジェクトも開始しました。研究活動を県民の皆様に広くお知らせし、『共創と知の循環で未来を拓く』姿勢を鮮明にすることで、知見を地域社会へ還元し続け、福島復興に貢献していきます。



公立大学法人福島県立医科大学  
理事（教育・研究担当）

鈴木 弘行

## 8 浜通りから世界を救う | TRセンターの ネクストステージ

### 8.1 浜通りの産業集積と先端創薬

本学は世界で初めて新型コロナウイルスに対する抗体をヒトの血中から直接採取することに成功しました。この抗体取得の独自技術を用いてさまざまな病原微生物等に対する抗体を取得し、南相馬市に開設した「浜通りサテライト」に備蓄していきます。

また、本学は、株式会社ARCALISの南相馬市への進出を支援するなど、浜通りサテライトを拠点として医薬品関連産業の集積・振興に努めています。研究支援や技術移転、専門的なコンサルティングを通じ、浜通りを次世代の創薬・医療産業のメッカへと押し上げることは、震災時に世界から支援いただいた恩返しでもあります。今後は、後継事業体である福島医大トランスレーショナルリサーチ機構が、引き続き本学の支援を受けながら、『浜通りの抗体が世界を救う』という強い意気込みで、感染症やがんの克服に向けた研究を強力に推進し、福島の産業復興に実質的な貢献を果たしていきます。



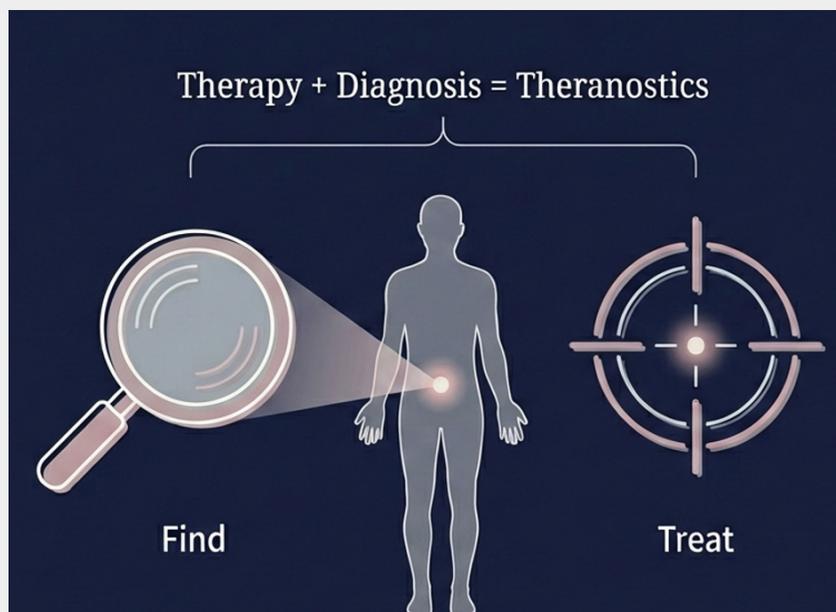
公立大学法人福島県立医科大学  
医療-産業トランスレーショナル  
リサーチセンター長

**渡辺 慎哉**

# がん治療における革新的な変化、 核医学治療の導入

## 9.1 希望の光としてのラジオセラノスティクス

本学は、放射性薬剤の製造から臨床試験までを一貫して行える国内随一の体制を確立しています。放射線が持つ力を医療という『希望の光』に昇華させる試みを進めており、2016年6月から稼働を始めたサイクロトロンを活用し、アスタチンを用いた前立腺がん治療候補薬 ( $^{211}\text{At-NpG-PSMA}$ ) のヒトへの投与、治験が始まりました。



この治験は、診断と治療を一体化した『ラジオセラノスティクス』の社会実装に向けた決定的な一歩です。副作用を最小限に抑えつつ難治性がんをピンポイントで攻撃するこの最新技術は、本学が誇るべき復興の象徴であり、福島から世界最高水準の先端医療を届けるという私たちの決意の証でもあります。引き続き、F-REIや関係大学等と連携しながら研究を着実に進めてまいります。



公立大学法人福島県立医科大学  
副理事長  
ふくしま国際医療科学センター長／  
先端臨床研究センター長

竹石 恭知

# 県民健康調査の継続と 30年にわたる見守りの約束

## 10.1 健康実態の「見える化」とバックアップ

県民の皆様の健康維持・増進のため、時間の経過により多様化するニーズを踏まえた支援を充実させています。センター全体で『広報戦略LINK』に基づき、ホームページでの日英2言語発信や県民公開講座の英語字幕化など、国内外への発信を強化しています。また、福島県版健康データベース（FDB）等の分析を通じて地域の健康課題を『見える化』し、相双地域など被災自治体の保健活動や食習慣改善を科学的根拠に基づいて強力にバックアップしています。調査結果を分かりやすくフィードバックし、県民に寄り添った健康づくりを支え続けます。



公立大学法人  
福島県立医科大学  
理事（県民健康担当）

大竹 徹

## 10.2 県民健康調査の実績と国際的発信

平成23年6月に設立された当センターは、同年度から県民健康調査は、放射線による外部被ばく線量を推計する『基本調査』に加え、詳細な4調査（甲状腺検査、健康診査、こころの健康度・生活習慣に関する調査、妊産婦に関する調査）の計5調査を実施しています。今年度で第8回を迎える国際シンポジウム等を通じ、福島の最新の科学的知見を世界に積極的に発信・共有してまいりました。急性期から移行した今、私たちは慢性期や予防医学へも焦点を広げ、個々の県民に寄り添ったライフステージを通じた健康維持を包括的に支援しています。調査結果を分かりやすく社会へ還元し、地域社会全体のウェルビーイング（心身の健康と幸福）を支える機関へと役割をさらに深化させ、県民の安心の礎であり続けます。



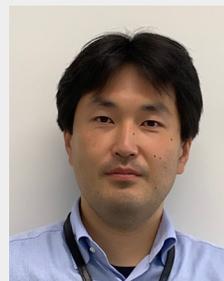
公立大学法人  
福島県立医科大学  
放射線医学県民健康管理  
センター長

安村 誠司

# 11 福島が示した災害関連死の深い教訓と科学的エビデンス

## 11.1 放射線リスクを上回る「避難リスク」の教訓

医学的に最も重要なのは放射線で直接亡くなった人はいない一方、避難など間接的な影響で多くの命が失われたという事実です。高齢者施設からの避難、生活環境の激変による糖尿病など生活習慣病の悪化、検診中断によるがん死亡の増加など、多層的な二次的影響が重なりました。私たちの検証によれば、避難に伴う死亡リスクは、当時の放射線被ばくのリスクを大きく上回っていました。この15年にわたる膨大なデータは、今後起こりうるあらゆる災害において『救えるはずの命を救う』ための世界的なエビデンスとなります。透明性を持ってリスクと向き合うリスクコミュニケーション（リスクコミ）の姿勢を、福島から発信し続けることは本学の責務です。



公立大学法人福島県立医科大学  
医学部 放射線健康管理学講座  
主任教授  
**坪倉 正治**



## 12 次なるビジョン | 12.1 ヒューマニティの伝承

# ヒューマニティの伝承と国際機関との連携

福島の実験は、専門的知識だけではなく、異なる専門性を有するもの同士の協力がいかに不可欠であるかを教えてくれました。いわゆる多職種連携です。さらに学内・職場だけの閉じた世界ではなく、グローバルな視点を養いながら国際協調を推進してきた経験を生かし、IAEAとのコンサルタンシー・ミーティングやWHO-REMPANW 緊急被ばく医療ネットワークへの貢献、ハーバード大学公衆衛生大学院 (Harvard T.H. Chan School of Public Health) のインターナショナルコースである『ウィンター・セッション 福島フィールドトリップ』の創設など、世界的な教育・研究そして専門機関との交流を一層進めています。新たに国際交流協定に関する規程を設けるなど基盤整備にも注力しており、本学の教職員や学生が自ら積極的に福島の新たな価値を創造し、課題解決が一層進むことを期待しています。この『ヒューマニティ』に満ちた福島の経験を国際社会と分かち合うためには、情熱と共感を大切にしながら次世代に伝えていくことが私たちの責務です。

公立大学法人福島県立医科大学  
副学長／国際交流センター長

山下 俊一

### 福島県立医科大学国際交流センター (Global Exchange Center)

本学の国際交流等に係る戦略的な企画立案・総合調整、学生や研究者の国際交流、国際活動等を一元的に管理する組織として令和元年7月1日に設立されました。

#### 学術・研究交流の協定校／海外の国際機関等との連携協力紹介



#### 大学

- 1 武漢大学医学部 ※現在休止中
- 2 ベラルーシ医科大学 ※現在休止中
- 3 ゴメリ医科大学 ※現在休止中
- 4 マウントサイナイ アイカーン医科大学
- 5 ホーチミン医科大学
- 6 オハイオ州立大学
- 7 国立メーチニコフ北西医科大学 ※現在休止中
- 8 シンガポール国立大学
- 9 国立台湾大学
- 10 ドイツ・ユリウス・マクシミリアン大学ヴェルツブルク
- 11 オックスフォード大学

#### 海外の国際機関等

- 国際原子力機関 (IAEA)
- 国際放射線防護委員会 (ICRP)
- フランス放射線防護原子力安全研究所 (IRSN)
- 世界保健機関 (WHO)
- フランス原子力防護評価研究所 (CEPN)
- 韓国原子力医科学院 (KIRAMS)

## 12.2 次世代に向けて新たな一歩を踏み出し

福島県立医科大学は、持続可能な福島の実現に向けて邁進します。



### Health Assurance

いのちと健康の  
永続的な守り

### Knowledge Transfer

教訓の継承と  
国際交流

### Innovation

災害復興を起点とする  
世界的イノベーション

我々は、福島 の地 にあってこそ、日本、そして世界の仲間たちと  
一緒に進もうというメッセージを送り続け、  
再生に向けた新たな15年へと力強く踏み出します。

# 未来へ繋ぐ次の15年

県民の皆様、今日まで本学が取り組んできた全ての活動は、震災後の福島の復興を支え、本学の使命を遂行するために立ち上げたミッションです。今日に至るまで、多くの教職員が地道に知力を絞って挑戦を続けてきた結果、その成果は確実に形になり始めています。これまでの皆様のご尽力に、心より御礼申し上げます。しかし、私はあえて皆様に申し上げます。ゴールが近づいたのではなく、私たちは今、新たなスタートラインに立ったのです。むしろ、このタイミングは、私たちに次なる新たなビジョンが求められている時です。見えてきたゴールの先に、皆様から新たに何が求められるのか。私たちは次なるビジョンを皆様と共に描いてまいります。本学は双葉地域の復興の中核を担うべく、附属病院化を受諾いたしました。遠隔医療を可能にする『スマートホスピタル』を目指し、廃炉作業を医療面から支えてまいります。また、附属病院の再整備では、『環境の変化に適応し進化する大学病院』をコンセプトに、健診機能を持つ『疾病予防センター（仮称）』の新設も予定しています。国や県など関係機関・団体との連携を進めながら、県民の皆様と共に、福島の未来を照らし続けてまいります。

公立大学法人福島県立医科大学  
理事長兼学長

竹之下誠一

# 未来へ繋ぐ「誠実なる一歩」

東日本大震災、そして原子力災害から、15年。私たちは今日まで、数え切れないほど多くの方々に支えられ、歩みを進めてまいりました。

本学の教職員の皆様もまた被災者でありながら、自らの困難を脇に置き、職務を全うしてくれました。その献身と、支えてくださったご家族の忍耐に対し、改めて深く、深く感謝申し上げます。

福島県民の皆様、全国、そして世界中から温かい手を差し伸べてくださった皆様。

福島県、各自治体、医師会、諸団体の皆様、そして共に地域医療を支える医療機関の皆様、日々の運営を支えてくださるお取引企業や委託先の皆様。志を共にし、切磋琢磨した学生たち、そして彼らを温かく見守ってこられたご家族の皆様。そして何より、私たちを信じ、自らの命を委ね、治療に専念してくださった患者さんとそのご家族に、心よりの敬意と感謝を捧げます。

未曾有の混乱のなか、迷わずこの地に駆けつけてくださった、長崎大学、広島大学をはじめとする全国の医療従事者・研究者の皆様。かつて人生の岐路において、自らの夢や平穏な日常を後回しにしてまでも、福島の復興という険しき道を選び、身を投じてくださった先生方。その献身と情熱を、私たちは一刻たりとも忘れることはありません。

そのご恩に報いる道は、ただ一つ。福島県立医科大学ならではの成果を挙げ、社会へ貢献し続けること。その決意を、ここに固く誓います。

復興への道のりは、まだ半ばです。本日、私たちは次なる15年へと、新たな一歩を踏み出します。今日私たちが刻むこの一歩が、「救えるはずの命を救い」復興への確かな軌跡となることを信じて。

福島の地で、目の前の患者さんに真摯に向き合う。研究室で、寡黙に真理を探究する。この「いつも通り」の積み重ねの先にこそ、真の復興があると信じ、私たちの挑戦はこれからも続きます。

---

『共創と知の循環で未来を拓く』